

東京バッハ合唱団 月報

[第 700 号] 2020 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 700

October 2020

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

トルストイ、ライプニッツ、バッハ

偉人たちの人生と傑作に出会う喜び

大村 恵美子 (主宰者)

9月号月報 (No. 699) p.3 で、私は「(辞世の心得として) 自分の気持ちにいちばん近い作家の作品を、なるべくよく理解しておこうと思ひ」、トルストイを全面的に読み直すことにした、とお伝えした。さいわい、日本語訳のものは、数作品を残してほとんど読み終えることが出来たが、不思議なことに、私の場合、自宅の本棚を点検し直したり、日々の新聞・雑誌の広告欄を見ているうちに、新刊本の中から、ちょうど欲しかったものが浮き出てくるのがしばしばある。近くの三省堂にも相談して、新旧の該当本がすぐに入手出来たりもする。

さて、トルストイが一段落しそうになって来たこの時点で、今度は、自宅の本棚をたまたま眺めていた時に、何の予感もないまま、ライプニッツ『モノドロジー 形而上学叙説』(中公クラシックス、2005年)を手に抜き出していた。

学生時代の頃から、私が哲学者のなかで重視していたのは、スピノザだったのだが、こと社会問題に関わるような場合に、私はよく「モノド」という語を話しの中で引用して来たものだった。この語によって、個々の単一の人間を思い浮かべ、これは17世紀の哲学者ライプニッツに出てくるものだったなと思い出し、パラパラと頁を開いてみた。

「モノドが表現・表出を本質的性質とすることは、モノドが、本質的に他者とかがわりをもつことにはかならぬ。[……]モノドとモノドとは、本質的に表現・表出の関係においてたがいに関係する。」(上掲訳書 p.56、下線は訳書では傍点)

あれ、これはまた、ついこの間まで、私がまとめ読みに耽っていたトルストイの基本信条に通じているではないか?!

「この世界に対する私の一定の独自の関係のうちに存するこの何かこそ、わたしの真の、実際の自我である。[……]他人を知っているとしたら、この世界に対するなんらかの独自の関係としてのみ知っているのである。」(新潮文庫、p.187-188、下線は訳書では傍点)

こちらは、数日前に読んだトルストイ『人生論』の中の1節で、もっと「モノド」に近いような記述があったように思うのだが、今すぐには見つけられない。ただ、いまライプニッツを目の前にした時点で、私が

トルストイとの近さを彼に感じとったのは、そう当てずっぽうでもないような気がする。両者とも、身近にあるキリスト教会の信者の一員として熱心な忠誠心を寄せるよりは、何かと批判的な心を抱いていたようだが、それは、福音書に見られるままのイエスの存在の仕方を物差しにすると、違和感が大きく、立ち止まらずにはいられない——これは私自身も、同感だからなのだ。

ライプニッツの読み返しは、私が着手したばかりなので、ここで軽はずみなことは言えないが、トルストイは、執筆ばかりでなく、自分の農地を処分して貧窮者に施したり、ぬくぬくと居心地よい邸に大勢の召使を働かせて暮らす自らの金満生活を断ち切ろうとして、病弱な老体を自ら駆使し、家出をして早々に命を落としてしまった孤独死の男だったし、いっぽうのライプニッツもよく似た境遇が知られている。

G. W. ライプニッツ (1646-1716) は、前途洋々の天才幼少年時代から、文筆活動だけではおさまらず、直接、国や教会のトップに接触して、自分の描く国家・教会の理想像を形成するよう引っ張って行こうとした。大きな期待で歓迎されるよりも、妨害者や敵を量産することのほうが多くて、カトリックとプロテスタントの合同、ルター派とカルヴァン派の合同、A国とB国との親善、C国とD国との戦争終結など、自分でどんどん背負い込んで成功させようとする。新発見の学説もまたしかりで、まあ、次代に確認されたものも多々あるようだが、晩年は種々の論争にも負けつづけ、トルストイと同じように「不遇と失意と孤独のうちに」、1716年11月14日死去、ハンノーファーのノイシュタット教会に納められたという。

トルストイとライプニッツを、ここまで取りあげてきたが、もうひとり、思想家というよりは、古今を通じて最高の音楽家として誰もが認める、J. S. バッハ (1685-1750) に登場してもらおうことにしよう。1646年生まれのリプニッツとは約40年の歳の差だが、ほ

月報 2020 年 10 月号 CONTENTS

- ・バッハが教会に帰ってくる (大村健二) …p.2
- ・『バッハの音楽的宇宙』を読んで (伊東浩史) …p.4
- ・おたより: ドイツから (イルゼ)、小樽から (西村清志)

ぼ同時代人といってもいいだろう。バッハは、教会や市のお偉方とのやり合いもあったらしいけれど、家族にも弟子たちにも恵まれ、リアルな町人生活などは、日々たずさわる教会音楽や世俗音楽の宝石に代えて、豊かな人生を全うした人だ。

トルストイ、ライプニッツ、バッハ、3人ともこれから先、全人類のいつまでも尊敬する最高級の偉人とどまることは間違いないが、とくに音楽芸術（身びいきは大目に見ていただいて）は、場所も時代もとび越えて、多くの人間に生命を与え、たのしみと喜びで、直切に、私たちを満たしてくれることにおいては、他の分野の功績の遠く及ばぬところである。私たちは偉大な芸術作品、それもとりわけ音楽をこの身でじかに味わうことで、生きていくことの至福を極めることができるのである。音楽芸術とは、なんといいがたいものか！芸術にかかわっている私たちも、よくよく感謝して生きよう。

バッハが教会に帰ってくる

《クリスマス・オラトリオ》の無聴衆上演とオンライン配信の試み

大村 健二（団員）

思えば、東京で「コロナ」が意識にのぼり始めたのは、2月初めのダイヤモンド・プリンセス号や屋形船の騒動あたりからだったでしょうか。その後、合唱団の合同練習も休止になり、この9月になってようやく4声部揃っての練習が再開されましたが、この間、夏のコンサートや合宿が中止になり、また12月の定期演奏会も大幅に開催形態を変えざるを得なくなった経緯は、先月の月報でお伝えしました。

当初、感染症の専門家が、この事態は2,3年つづくかも知れませんが、と述べるのを聞いてもにわかには信じられませんでした。すでに半年が過ぎ、こういうことだったのか、と納得してみたり、行く末を案じたり。人と人が距離をあけ、顔を覆い、家にこもり、いろいろなものが先送りされ、途絶えてしまいました。もやもやが晴れる気配は、当分、なさそうです。

この「月報」をお読みくださる方々の範囲で言えば、もやもやは、歌うことのできない合唱音楽とは何なのか？そして、J.S.バッハの合唱音楽は、果たして無力か、いや、今こそその真価を発揮してくれるのか、云々といったことに関わっているのかも知れません。

音楽の歴史をさかのぼれば、合唱することの自由を奪われた事態は、たぶんいくども訪れていたことでしょう。音楽史の研究者であれば、戦禍に遭遇してどうだったのか、宗教や政治権力の都合で禁じられたことはなかったのか、そしてもちろん、感染症の蔓延時にどうだったのか、などを数え上げることができるでし

よう。歌うな！だけではなく、歌え！も、ついでに例を挙げてみせて欲しいものです。

* *

『ロビンソン・クルーソー』の作者、ダニエル・デフォー（1660-1731）は、J.S.バッハ（1685-1750）の同時代人です。デフォーがロンドンの1665年のペスト大流行の観察録『ペスト年代記』を発行した年の翌年、バッハはトマス・カントル職への採用試験の課題曲として2曲のカンタータ（BWV 22, BWV 23）を上演しています（ライプツィヒ、1723年）。18世紀当時のドイツ中部にあって、バッハに直接、ペストなどの感染症が影響したという記述を、管見では目にした覚えはありませんが、前の世紀の三十年戦争では2度のペスト流行もあって、ドイツ国土は荒廃し、人口減少は数百万とも言われます。この悲惨を慰めるコラールが次々に作られ、民衆のうちで愛唱されました。バッハも作品中に多くを引用しましたし、多くのカンタータのテクストのなかに、民の悲痛が影を落としています。

ペスト（とくに14世紀のヨーロッパ）や結核（とくに19世紀のイギリス都市部）の感染蔓延による、農民の減少や人口の移動が、中世の終焉や資本主義世界の形成を後押ししたと言われます。このコロナ禍の終息の後、何が、どう変わっていくのでしょうか。変わってほしいのに変わり損なうものは、いったい何なのでしょう。よく目を凝らして見届けたいものです。

* *

12月に予定していた定期演奏会の曲目《クリスマス・オラトリオ》は、教会では毎年、部分ごとの演奏をつづけてきましたが、コンサートホールでの大掛かりな上演から、ここしばらく遠ざかっていたので、満を持して、全曲をフルオーケストラで、と意気込んで臨んだものでした。それだけに、中止にあたり、団員の落胆は量り知れません。

また、われわれの演奏を愛してくださっているご常連の方々の中にも、オラトリオ冒頭、太鼓とラップの、あの開幕を、ワクワクしながら待ち構えていた、という方も大勢いらっしゃるに違いありません。

無聴衆上演とオンライン配信は、そうした思いを背負っての試みです。感染拡大の勢いはいっこうに衰えていませんし、ウィルスの実像はいまだに謎だらけです。治療法も治療薬もワクチンも開発途上。感染対策も確立されていない。こんななか、会場を提供くださる荻窪教会の小海牧師および教会員の皆さまには、そのご厚情に心より感謝いたします。さらに、社会生活のただなかで活躍しながら音楽活動に情熱を傾けていらっしゃる、演奏愛好家集団ARSの皆さまにも、その熱意と勇気とに心よりの敬意を表します。

こうしたご協力を得て、団員総出で知恵をしばりながら、どうすれば出演者同士の安全な配置が可能か、どうすれば時間を停滞させずに楽曲の収録を果たせるか、等々、無聴衆上演の本番まで、模索はつづきます。

秋の七草

万葉集 秋の七草（山上憶良）

秋の野に 咲きたる花を 指折り
かき数ふれば 七種の花

〔其の一〕（一五三七）

萩の花 尾花 葛花 撫子なでしこの花
女郎花おみなへし また 藤袴くずばな 朝顔あさかほの花

〔其の二〕（一五三八）

しかしながら、どうせやるなら、これまで考えも及ばなかった発想で障害を見直し、意味付けを改め、枠を外し、ただただ、ひたすらバッハ音楽の本質に帰ることだけを求めて、企画を練ってみようとしています。

たとえば、こんな具合に（荻窪教会を想定）；

① 聴衆の不在を良いことに、収録という意識も離れ、われわれ（コーラス・楽器奏者・独唱者・指揮者）が純粋に音楽を楽しむ。

② 神への捧げものとしての音楽、礼拝音楽の本来に立ち戻る。

③ 礼拝堂の全空間を「楽器」として意味づける。従来の客席/舞台という視点を捨てる。

④ 祭壇の上の明り取り（換気のダクト機能を果たしている）、ここを天への通路と見なし、上演レイアウトの重心とする（ただし、これは単なる象徴でも可）

⑤ 空気（音楽の響きと流れ、換気）＝息（声楽と管楽器、マスクとシールド）＝そして霊（プネウマ）。

⑥ 換気（空気の流れ）装置や防護の施策を、音楽の妨害物としない。楽器のパーツ、アンサンブルの仲間。

⑦ 換気で結ばれる近隣住民、通りにあふれ出る音楽を浴びる通行人が開け放たれたドアから覗く（あらかじめ、チラシのポスティングで周知）。

⑧ 感染防止を万全に対策する。

⑨ 録画のカメラは、上記①から⑧を、気張らずに（これが大事）、写し撮れる位置取り。

⑧⑨を、敢えて下位の要件としましたが、上の項目の意図をいくつかでも実現できれば、配信の画面は、クリスマスの喜びに満たされるはずです。＜了＞

無聴衆上演とオンライン配信

（無聴衆で全曲収録、クリスマスシーズンに YouTube で配信）

● カンタータ第 110 番《喜び 笑い あふれ》BWV 110

● 《クリスマス・オラトリオ》第 1～3 部 BWV 248^{1-III}

[独唱] 平良栄一（テノール/エヴァンゲリスト）

[室内楽] A R S（コレグム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）有志

[オルガン] 中澤未帆 [指揮/訳詞] 大村恵美子

[収録] 2020 年 12 月 5 日、6 日（荻窪教会、無聴衆）

[配信予定] クリスマスシーズン中。現在調整中。後日、配信日、YouTube の当団専用チャンネル URL などの詳細を、月報/ホームページ/Facebook 等でご案内します。DVD 等も併せて制作。

■ はぎ



■ おばな（すすき）



■ くずばな



■ なでしこ



■ おみなえし



■ ふじばかま



■ あさがお（ききょう）



● 写真：Herbal Life42, 2019.09.27

<https://www.noenvir.co.jp/Botanical/t/20190927/indexWebForm.aspx?c=01>

『バッハの音楽的宇宙』を読んで

伊東 浩史（整形外科医院勤務）

拝読いたしました。

この本は、「はじめに」にある通り、語彙が貧困な、何の感性的手がかりの得られないほめ言葉の羅列、常套句の乱用を避けてあります。

そこで浮かび上がるのが、著者・大村恵美子氏の言葉の豊かさです。ヨハネ福音書には「はじめにことばありき」と記されています。言葉があり、そこに感情、思想、思考が受肉していくものだと思います。まさに大村氏の言葉です。

バッハの生活、当時のヨーロッパの生活、社会情勢、それを引き合いに鋭いまなざしで現代社会への批判も含んでいます。その批判は人間への信頼、愛情に裏付けされた警句といえます。また、現代の日本人に理解しやすいように西洋と日本の対比があります。それは、決して批判的でなく、単に生活様式、考え方の違いを示しているだけであって、西洋、日本、人間への信頼と愛情を感じます。

「ユダヤ教からキリスト教への跳躍」(p. 101)、《ヨハネ受難曲》(p. 105)、「無反省、同調、神への裏切り、改悛、目ざめ、回心、信仰、忠誠、という複雑な経路を辿りながら、人間は神の愛を受け入れるに至る」、「強靱でしたたかな文化の産物」(p. 107)。

キリスト教には、キリスト教自体への批評性があります。カルチャーに付随するカウンターカルチャーが聖書自体に含まれていることが人間的な豊かさを与えていると思います。仏教で言う「業の肯定」にも似た深みがあります。

「バッハの音楽的宇宙」でありながら、バッハにとどまらずキリスト教、西洋、日本、人間への著者の造詣の深さが読む者に力強さを与えてくれる一冊です。

[文中のページ指示は、電子版の数字です]

大村恵美子 [著] 『バッハの音楽的宇宙』(電子書籍版：丸善出版、2020年6月刊、価格1000円＋消費税)

[お求めは] ●丸善雄松堂 Knowledge Worker (ebooks) : <https://kw.maruzen.co.jp/ims/itemDetail.html?itmCd=1031850234> または ●大学生協 Varsitywave eBooks : <https://coop-ebook.jp/asp/ShowSeriesDetail.do?seriesId=MBJS-371727>

ドイツのコロナ禍、イルゼからのおたより

イルゼ・キーゼヴェッター

愛する恵美子、健二

すてきなお手紙を、ほんとうに有難うございました。その内容も、とてもうれしく思いました。私の子どもたちも、その家族も、私も、まだコロナウイルスの被害は受けていません。

何人かは、被害を免れるために、家庭内や家の事務

室で仕事をしています。ズージーは、2人の子どもがいるので、当分家にいます。

ズージーは32歳となるところで、私たちはその誕生祝を午後に行います。目下、彼女は、例えばグループ舞踊とか、コンサートとか、旅行など、多くのことが出

来ないまま、家ですごして、残念そうです。

でも私たちは、満足して暮らし、健康でいられるようにと願っています。

私たちは、あなた方も、暫くしたらまた合唱団で働かれますよう、そしてもちろん、ご健康が保たれますよう、お祈りします。イルゼ、子供たち、孫やひ孫たちも、あなた方に心からのご挨拶をおくります。

2020年8月16日

(ライプツィヒ近郊、アンメルスハイム)

JK

Ammelsheim
16.08.2020

Liebe Emiko, lieber Kenji,
Guten Dank für den lieben Brief, nebst Inhalt, über den ich mich sehr gefreut habe.

Meine Kinder mit Familien und auch ich sind bisher vom Corona-Virus verschont geblieben.

Einige arbeiten zu Hause im Home office, um einer Ansteckung zu entgehen. Susi ist nach der Geburt ihres zweiten Kindes zur Zeit zuhause. Sie wird heute 32 Jahre, am Samstag feiern wir ihren Geburtstag. Viel Abwechslung gibt es zur Zeit leider nicht, zum Beispiel die Tanzgruppe, Konzerte oder Reisen, was mir etwas fehlt.

Wir wollen aber aufpassen sein und hoffen gesund zu bleiben.

Auch ihnen wünschen wir, bald wieder mit dem Chat arbeiten zu können und natürlich gute Gesundheit.

Liebe Grüße von ihrer

Ilse
nebst Kindern, Enkeln
und Urenkeln



お・た・よ・り

西村 清志（後援会員、小樽市在住）

「日本歌唱集」(改訂版)、ありがとうございました。ぼくなんかには、大変な手間・ヒマがともなうやっかいな作業のように思えるのですが、その労を惜しまず早速やってのけてしまうのですから、ただただ頭が下がります [団員の方の手作業：E]。同時に、先生の“ことば”に対する厳しさを学ばせていただきました。改めてお礼申し上げます。

ところで、今週のNHK-FMで「欲望」をテーマにしたバッハの世俗カンタータ「我が心は満ち足りて」(タイトルには自信ありません。以前、月報でも紹介されていた加藤拓未さんが解説されていました)[Ich bin in mir vergnügt BWV 204]を聞いたのですが、これは「足るを知る」(まさに東洋思想の主流でもあります)ことこそ、神の意に適った生き方であることを説いていて、現代の欲望資本主義によってもたらされた「格差」や「環境破壊」が大問題になっている今日、キリスト教会の人がこの曲を聴いたら、どう反応するのだろうかと思いました。